

向暑の候 宮崎県防衛協会青年部会宮崎支部会員の皆様には、益々ご清福の段大慶に存じます。

また皆様には日頃より当支部運営に際し多大なるご協力を賜り、深甚なる敬意と感謝を表する次第です。

さて5月の自衛隊関連行事は、3日に軍事アナリストの小川和久先生を講師にお招きして、日本国憲法施行70年「トランプ政権の衝撃で揺れる世界・どうする日本」の演題で、約2時間の憲法講演会を開催し致しましたが、大凡400名の参加者は真剣に聞き入り、終了後のアンケートでも大変好評でした。

更に同14日はえびの駐屯地開設36周年記念式典が晴天の下に挙行され、今年初めて第一空挺団の精鋭4人が駐屯地上空から自由降下で侵入し、強風の中狭い営庭に見事に着地して、観客から盛大な拍手喝采を頂いていたようです。

今年になって北朝鮮のICBM発射実験が次々と成功し、その射程は日本やグアムは言うに及ばず、ハワイや米本土まで届かせると彼等は豪語しています。

先日サミット後の記者会見席上、安倍首相は新型迎撃ミサイルシステムを導入すると発表されましたが、果たしてそんなもので北朝鮮からのミサイル攻撃を防御できるのかと、国民誰も不安に駆られるものと考えるところです。

日本国及び日本国民存続のためには核武装を含めた、策源地攻撃までを視野に収めた国防議論を巻き起こさないと、「憲法守って国滅ぶ」の正に冗談のような悪夢が現実になるような気がしてなりません。

アメリカもミサイル防衛システムに本腰を入れてきているようで、いよいよ北朝鮮の挑発がどこまで本気なのか、最大の被害が予想される日本国民とすれば本気で国土防衛について熟慮断行の時が来ています。

今月は西特任助教のコラムを以下に掲載しますのでご一読賜れば幸いです。

## ・北の多弾頭ICBMを迎撃する米国の新型ミサイル

(静岡県立大学グローバル地域センター特任助教・西恭之)

北朝鮮が米本土を射程に収める大陸間弾道ミサイル(ICBM)を完成させた場合、米国のミサイル防衛の効果を低下させる目的で、複数の弾頭とデコイ(おとり)を大気圏外で放出する機能を搭載することは確実だ。

米国の現在の弾道弾迎撃ミサイルは、1発あたり迎撃体を1基しか搭載していないので、攻撃側は弾道ミサイル1発を配備することによって、複数の高価な迎撃ミサイルの配備を強いることができるからだ。

しかし、迎撃ミサイル1発に、1基ずつが目標を探知・追尾して迎撃するためのセンサーと姿勢制御スラスタを備えた、複数の迎撃体を搭載すれば、全ての弾頭とデコイに迎撃体を命中させることも可能になる。

米国防総省ミサイル防衛局は、地上配備迎撃ミサイル(GBI)に搭載する多目標迎撃体(MOKV)の開発を加速し、従来の計画より5年早い2025年の開発完了をめざすことを、5月23日に発表した2018年度(17年10月-18年9月)予算案の中で明らかにした。

GBIは、全長17メートル、直径1.3メートル、重量13トンの3段式固体燃料ミサイルで、地下サイロから発射される。ペイロードである大気圏外迎撃体(EKV)は、宇宙空間で弾道の間段階(ミッドコース)を飛行中のICBM弾頭に向けて、内蔵するセンサーによって誘導され、液体燃料ロケットで姿勢を制御し、体当たりして破壊する。ロケット・ブースターはオービタル・サイエンシズ(現オービタルATK)、EKVはレイセオンが製造し、ボーイングがシステム統合を行っている。

アラスカ州フォート・グリーリーに26発、カリフォルニア州ヴァンデンバーグ空軍基地に4発のGBIが2010年に配備された。オバマ政権のヘーゲル国防長官は2013年3月、北朝鮮のICBM開発に備えて、さらに14発のGBIを17年までにフォート・グリーリーに配備することを決定した。

それまで、複数の迎撃体を搭載する迎撃ミサイルとしては、スタンダード・ミサイル3(SM-3)ブロックIIBの日米共同開発が始まっていたが、ヘーゲル長官は、GBIを追加配備する予算を捻出するためという理由で、SM-3ブロックIIBの開発を中止した。

専門家の間では、GBIの配備が、性能と信頼性を試験で示す前に、政治的理由で性急に進められたとの批判が根強い。GBIによる地上配備ミッドコース防衛(GMD)の迎撃試験の成功率は、模擬標的ミサイルが故障した回を除いて、1999年10月から2014年6月までの17回中9回と、53パーセントにとどまっている。

2016年1月にはEKVの新型の姿勢制御スラスタをテストするため、模擬標的に接近させる試射が行われた。しかし、スラスタ4発のうち1発が、誘導システムの故障により停止した結果、EKVと模擬標的の間隔は予定の20倍に開いてしまい、同じ故障が起きた場合は目標に体当たりできないことが明らかになった。

5月30日には、最新型のCE-IIブロックI型EKVとC2型ブースターによる迎撃試験が

予定されており、北朝鮮が弾道ミサイル開発を進める中、米国が迎撃ミサイルの信頼性を示すことができるのか、注目を集めている。

多目標迎撃体(MOKV)のほうは、EKVの機能を小型化して複数をGBIに搭載するもので、レイセオン、ロッキード・マーティン、ボーイングが2015年に概念設計を行った。ミサイル防衛局の予算案概要説明書の概念図では、GBI 1発に8基のMOKVが搭載されている。

ボーイングは5月23日、MOKVの開発を進めて技術を実証するための5860万ドル(65億円)、35か月間の契約を、ミサイル防衛局から5月12日に受注したと発表している。以上

日本海に米海軍の原子力空母2隻が遊弋する中、北朝鮮は積極的な瀬戸際外交を繰り返し、我が国の排他的経済水域内にICBMを何発も打ち込んで来ます。

この状況は昭和12年前後の日中関係を彷彿とさせるものがあり、尼港事件や通州事件等の当時支那の残虐行為にひたすら耐えて、我慢をさせられた日本国民は、「暴支膺懲」をスローガンに、その後の日中戦争に突入して行きました。

日本が憲法に縛られ何も出来ぬ事を良いことに核やミサイルで恫喝し、我々に云うことを聞かせようとする今日の北朝鮮の外交手段を見ながら、80年前支那の暴虐に切齒扼腕した父祖の胸中を忖度すると、不思議に重なるような気がいたします。

先人の知恵に学びながら愚かな歴史を繰り返さぬようと云うのは簡単ですが、強盗のような隣国から我が身を守るのは、我等自身の決断と備えしかありません。

5月3日、安倍総裁が憲法改正発言の中で自衛隊明記に言及され、河野統合幕僚長は思わず「ありがたい」と仰ったようですが、現職自衛官の本音だと思います。

我々防衛協会青年部会もこの国を守るため、憲法改正に向けて確実に歩武を進めていかねばなりません。

会員各位の更なるお力添えを伏してお願い申し上げます。

尚時節柄、呉々もご自愛専一にお過ごし下さい。

平成29年6月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦